第601号 平成7年6月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

マカルー峰東稜より登頂に成功!!

マカルー登山隊1995・隊長　重廣恒夫

チョモロンゾ峰よりみたマカルー峰東稜

日本では野山の彩りも初夏の様相を呈してきた頃ではないかと思いますが、会員の皆様におかれましてはその後いかがお過ごしでしょうか。

さて、早いもので二月十五日に日本を出発し、未踏のマカルー東稜に赴いて、本日で百一日が経過しました。

チベット地方では一九八八年以来の大雪に遭遇し、偵察隊はルートの偵察はおろか、ベースキャンプ予定地に接近することもできず、本隊を迎えなければなりませんでした。そして、夏道とは違う行程と、いくつものグループに分かれた複雑なキャラバンに難渋し、雪深いマカルー・ベースキャンプに入ってからもはや五十六日が過ぎ去りました。入山当初、積雪量が一二〇センチもあった雪の台地は、チベットの強烈な太陽光線でいつの間にか溶け、シャクナゲ、ツツジ、サクラソウの大群落となり、あちこちに可憐な花を咲かせています。また、それらの木々の間を何種類もの小鳥がさえずり、まさに今のベースキャンプは桃源郷の様相です。

さて、登山活動のほうは三月三十日ベースキャンプ到着以来、三九六〇メートルから順調に伸びていたルートも、C3からC4へは複雑なルート工作が十日以上、立ちはだかるアイスビルディング、オーバーハングのアイスウォールのルート開拓にC4からC5が二週間以上かかるなど、想像したより難しいルートで、登山計画が予定より大幅に遅れました。しかし、ベースキャンプでつかの間の休養をとった登山隊員、シェルパは五月二日から順次上部キャンプに移動。五日は悪天のため各キャンプで停滞。六日より大量降雪で埋まったフィックスを掘り起こしたり、雪崩で吹き飛ばされた支点を修復しな

1995年（平成7年）
6月号（No.601）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

マカルー峰東稜より登頂に成功!! 1
自然保護随想……2
マカルー通信……3
報告
八甲田山山スキー講習会……4
三水会・3月現地集会……5
東西南北
エベレストが2メートル低くなった話……6
海外の山……7
図書紹介……8
『山を歩けば』『山からのたより』『志賀重昂ー回想と資料』『秋田県田沢湖町駒ヶ岳山麓イヌワシ調査報告』『覆刻日本の山岳名著』ー会員特別頒布に寄せて……9
新入会員……10
住所変更・創立90周年記念事業募金応募状況……11
支部だより……12
北海道・山形
会員異動……12
山と医療……13
会務報告……13
ルーム日誌……14
INFORMATION……15

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10～20時
水・金曜日　13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

がらC5に向かいました。十一日は六六〇〇メートルの地点で難しい氷壁にルートを開拓、十二日以降は深いラッセルに苦しみながらもルートを伸ばしてきました。

私はそれまで長くベースキャンプにおりましたが、十三日からはマカルー東稜の全容が見渡せる五三〇〇メートル地点に滞在し、最後の一瞬に賭けた指揮を取りました。

途中、頻発する雪崩に打たれ、やむなく数人のシェルパのリタイアを甘受しなければなりませんでした。そしていくどもの苦しい荷揚げの後、アタック隊員は十七日に六三〇〇メートルのC4を出発。途中セラックの崩壊などによる時間的な理由で余儀なくルート変更させられましたが、十九日に七三五〇メートルの地点にC6を建設しました。そして五月二十一日、第一次隊四名（田辺、山本篤、松原、荒井）が烈風吹きすさぶ八四六三メートルの頂上に到達、二十二日には第二次隊四名（山本宗、谷川、小野、竹内）も登頂に成功しました。

マカルー東稜は予想以上に難しいルートでした。とくに連日の雪崩、ルート損壊の恐怖は登山隊員はもとより、私にとってもトランシーバーのスピーカーを通じての隊員の声に『進むべきか』『退くべきか』、その選択の脅迫に脅える毎日でありました。とどのつまり隊長とは、やさしいルートは別にして、『起こり得る危険に耐えて指揮を継続することができるか、恐怖に耐え兼ねて登山の継続を放棄するか』の二者択一しかない立場だと自覚する毎日でもありました。

しかし『頂上に立ちたい』『立たせたい』という意欲は、天候の運、時の運を得て、多くの隊員が世界第五位の頂上に到達する原動力となりました。そして、頂上に立った隊員たちのほとんどは『登頂』という二文字に満足しているかもしれませんが、私にとっては『完登』できなかった『心残りの山』ともなりました。長期間、寝食を共にしてきた隊員たちには『マカルー登頂は一瞬の感動』であって『明日からの我々の新たな目標に対しては、ほんのわずかな体験でしかない』ということを自覚し、さらなる精進をしてほしいものです。今年のマカルー登山は『雪に泣かされ』また『思わぬ好天に恵まれた』登山でもありました。

最後になりましたが、登山隊の出発に精魂を傾けられた藤平総隊長はもとより、生活を犠牲にして奔走された事務局の方々、そして長期間にわたってご声援くださった会員の皆様に心からお礼申し上げます。

（五月二十六日　ベースキャンプにて）

自然保護随想

ザックの中身

関塚貞亨

新緑の浅間尾根を縦走していて、浅間嶺をすぎて時坂峠への最後の下りにかかったとき、道の真ん中に紙屑やビニール、プラスチック類が散乱していてショックを受けた。

ウィークデーの奥多摩秋川山域は比較的静かで、縦走路もきれいだ。飴の紙ひとつ落ちていない登山道を気持ちよく歩いていたのに「どうしたわけだろう」と見回すと、五メートルほど先に破れたビニール袋が落ちていた。おそらくゴミ袋をザックの後ろへ縛り付けていたのが、解けて落ち、野犬か野鼠が食い荒らしたのであろう、と納得した。

縦走路で会った人のなかに、白髪の高齢者と中高年の女の人のグループがあったが、昼食時にゴミの始末をきちんとするだけでなく、ゴミの量が少ないのにも感心した。過剰包装を避けて、ザックの中を整理して登っているのであろう。

この二、三年、首都圏近郊の山は清潔になった。山で会う人たちは、中高年の人が多く、若い人が少ないのは残念だが、グループの中に、必ずビニールのゴミ袋を用意している人がいるし、単独行でもゴミを捨てる人は、ほとんどいなくなった。

これも、いろいろな団体が、山の清掃運動を続け、マスコミも環境問題を取り上げることが多くなった成果といえよう。これで、浅間尾根で会ったグループのように、過剰包装に気を配るようになれば満点だ。

しかし都会では別だ。近ごろは、昔ながらの箱入りのプロセスチーズに切れ目を入れて、あらかじめスライスしてある便利な品が出回っているが、Qチーズなるメーカーが「うちの製品はチーズの小片を一つ一つ包装してある」と、違いをテレビで宣伝していた。このような過剰包装が消費者に通用するとしたら、環境問題への意識は本物とはいえまい。

海外登山でもゴミを減らすため、保存に万全を期しながら包装を簡略化することに苦心している。ある遠征マニュアルに「チョコレートの銀紙ははがしてはいけない」とあり、なるほどと感心しながら、銀紙をはがした場合の失敗を想像して笑ってしまった。

MAKALU・MAKALU・MAKALU・MAKALU

マカルー通信・10

5月2日　ＢＣにて
重廣恒夫

4月13日より4月末で第二期を開始、この期でできればＣ５の建設とＣ６までのルートを開設したいと考えていたが、予想外に難しく細いナイフリッジにてこずり、29日までかけてやっと6300mにＣ４建設、6550m付近までルート工作するにとどまった。

Ｃ３(5750m)からＣ４(6300m)までのルートは、Ｃ３から若干下降気味にトラバースしてルンゼに入り、６ピッチで稜線に抜け出た。部分的に非常に難しく、稜線の手前では今後の荷揚げを考えて５ｍのラダーを設置した。

稜線上は途中での人工登攀も含めて、岩場とナイフリッジに大いに苦戦した。そしてアブミ３台、ラダー１台を設置、氷の部分には足場をカッティングし、さらに９ピッチのフィックスを張った。その後、傾斜の比較的緩くなった稜線を深いラッセルで、広い尾根上の6300mに到達。予定より100m低いが、ここをＣ４とした。Ｃ４より50mのアイスフォールを越えて12ピッチ延ばし、6550mに到達した。

4月29日から30日にかけて、それぞれのキャンプから隊員、シェルパがＢＣに下山し、第２期を終了した。天候には比較的恵まれ、悪天による停滞は１日しかなかったが、ルートの困難さと好天による暑さで隊員の体力の消耗は多大であった。しかしＣ２～Ｃ３に荷揚げ中、ルート上で５回の雪崩に遭遇したが、全員無事であった。またＣ１～Ｃ３間の荷揚げも、隊員、シェルパの頑張りで予定通りの隊荷を集積することができた。

■今後の予定

Ａ隊：渡辺、馬場、岡本、竹内
Ｂ隊：田辺、山本篤、小野、松原
Ｃ隊：山本宗、谷川、荒井

5月2日から4日にかけて各隊（Ａ、Ｂ隊はシェルパ各６名を同行)がＢＣを出発し、第３期を開始する。

5月9日：Ｃ５建設
16日：Ｃ６建設
18日：登頂
29日：ＢＣ出発
6月9日：ラサ
14日：成田到着

＊したがって日本帰国は当初より10日前後遅れそうだが、5月10日に最終決定をする。
＊重廣は5月11～20日にかけて5300m（Ｃ２上）に滞在し指揮を取る。

マカルー通信・11

5月11日　ＢＣにて
重廣恒夫

3月30日の入山以来、3960mのＢＣから順調に伸びていたルートも、Ｃ３からＣ４へのルート工作に10日以上かかるなど難ルートで、登山の計画が予定より大幅に遅れましたが、モンスーン到来の関係もあり、今回の第３期（5月2日～25日）でマカルーの登山を終了したいと思っています。28日にはＢＣ集結の予定です。

5月2日から、順次上部キャンプに移動しており、5日は悪天のため各キャンプで停滞、6日より大量降雪で埋まったフィックスを掘り起こしたり、雪崩で吹き飛ばされた支点を修復しながらＣ５に向かっています。

今日（11日）は隣の日大チョモランマ隊の北東稜からの初登頂の報を聞きました。われわれマカルー東稜も予想以上に難しいルートですが、天候の運・時の運を得て20日頃にはアタックをかけたいと考えています。小生も13日よりＣ２に上がり、マカルー東稜を見渡すことのできる5300mの地点から最後の指揮を取るつもりです。

マカルー通信・12

5月15日　ＢＣにて
田久和義隆

13日、Ｃ５（6820m）を建設。田辺、松原、山本篤がＣ５入り。重廣隊長、パルテンバ・サーダー、志賀Drの３名がＣ２入りした。

昨日（14日）Ｃ６ルート工作隊は7090mの稜線に達し、頂上までの全ルートを確認。稜線上からはチョモランマ、ローツェが素晴らしく見えたという。その後ルート工作隊３名はＣ４へ下山。

15日、Ｃ４に集結した隊員７名、シェルパ６名。今日は休養日。

マカルー通信・13

5月16日　ＢＣにて
田久和義隆

5月15日、Ｃ２の重廣隊長より以下のように今後の行動計画が発表された。

5月16日：Ｃ４にいる隊員（谷川、山本宗、松原、荒井、田辺、山本篤）がＣ６入り。６名のシェルパも荷揚げ
17日：行動の詳細発表
18日：Ｃ６建設
19日：Ｃ７建設
20～21日：２回の登頂を狙う

＊ルートは5月14日7090m地点で確認したマカルー・チョモレンゾ間の比較的安全、確実と思われる雪原を利用して頂上を狙いたい。
＊好天が予想される17～23日が、モンスーンの影響を受けない最後のチャンス、と考えている。
＊25日にはすべての隊員がＢＣに集結する予定。　以上

REPORT　報告　REPORT

八甲田山・山スキー講習会
高田大岳を滑る

指導委員会

快晴の高田大岳頂上で記念撮影

恒例になった指導委員会の八甲田山山スキー講習会が四月二十二日より二十四日まで行われた。参加者は二十五名。震災地の関西支部から久保さん、地元の青森からは高橋さん、三上さんが現地で参加されたが、いつもの世話役松丸さんと入澤さんの顔が見えないのはちょっと淋しかった。七時五十五分羽田発のＪＡＳで青森空港へ。羽田の天気はよくなかったが、岩手山、八幡平の上空はよく晴れて、雪化粧した山々が俯瞰された。

ツアーガイドの相馬氏に出迎えられ、マイクロバスで八甲田山荘に昼前に到着。昼食後さっそく足慣らしにロープウエーで田茂萢岳に登り、前岳から銅像コースを滑る。ザラメ雪で快適な林間滑走だ。ロープウエー、リフトの最終は十六時なので、再度登る人もいた。

夜の天気予報では翌日はどうも雨らしい。何とか予報が当たらないことを念願しつつ、夕食後懇親会に移る。青森の地酒に舌鼓を打ちながら、自己紹介に始まり、体験談や思い出話に深更まで賑やかであった。

朝起きると予報的中。霧と雨である。小林リーダーと倉井さんが相談の結果今日は沈殿と発表される。あきらめきれない人たちが集まって一滑りと雨の中を田茂萢岳に登り、ダイレクトコースを一本滑ってくる。十時すぎに宿を出て青森駅前市場の観光と青荷温泉へと向かう。青森港の岸壁には立派な物産館が建っていて、海上にはラブリッジと名付けられた大きなハープ橋が青森駅を跨いでなかなかの景観である。青荷温泉はランプの宿で人気がある。雪が残る渓流の側に冷えノ湯露天風呂と熱ノ湯外湯があり、二度三度と入る人もいたが、混浴なので女性の入浴者は少なかった。

二十四日は素晴らしい快晴となる。八甲田山最長コースの田茂萢岳、大岳、小岳、高田大岳へ挑戦と発表され、大いに気分が盛り上がる。高橋さん、三上さん、津田さんが帰って、二十二名が山頂駅に集合する。九時四十分田茂萢岳を出発。無風快晴。前方には赤倉岳、井戸岳、大岳に続く雪尾根があり、右前方には南八甲田山の櫛ヶ峰、駒ヶ峰、乗鞍岳、はるか西方には真っ白な岩木山が望まれる。

一滑りしてシールを貼り、大岳ヒュッテに向かって登り出す。シャツ一枚でよいほどの暑さだ。大岳ヒュッテはログハウスに改築中で、この夏に使えるようになるとのことで入れなかった。大岳と井戸岳のコルは風の強いところであるが、今日はそれほどでない。一休みして大岳に登る。やがて小岳、高田大岳が目の前に見えてくる。南側を八合目まで登り、小岳のコルに向けて滑降。またシールを貼って小岳に登る。小岳の南東側斜面は素晴らしい雪原だ。思い思いにシュプールを描いてコルに到着し昼食にする。雪穴を掘ってガスコンロでトン汁を作る。冷えたビールで乾杯。春スキーの醍醐味である。食後いよいよ最後の登りにかかる。

高田大岳の頂上までアオモリトドマツの間を縫って約一時間、途中からハイマツ帯になるのでスキーを担いで登る。雪が溶けて泥んこの夏道である。頂上は東西に細長く、東側に大きなケルンと祠がある。南方に目を向ければ、昨年五月二十九日青森支部設立記念山行した戸来岳がよく見えたし、北方には下北半島の先に北海道らしき陸地がぼんやりと霞んでいた。全員で記念写真を撮り出発。

スキーを担いでハイマツ帯の道を少し下ると雪原に出る。狭く急で下が見えない雪原を横滑りで五〇メートルほど滑ると下が見えてきて、いよいよ標高差五五メートル、無木立の大斜面である。ザラメ雪で気持ちよく滑る。下の樹林帯まで真っ白な雪原に横Ｓ字いっぱいのシュプールを描いて滑走す

る。下から見上げると左のルンゼ状のところに鋭角なS字のシュプールが一本鮮やかだ。小林さんのだ。最後に倉井さんが右側の疎林の中を華麗に滑って、全員の拍手で迎えられる。二十二本、一人ひとりが夕陽に浮き出たシュプールを確かめて話が尽きない。

一休み後、谷地温泉へ向け林間滑走して大滑降は終わる。宿へ向かうバスの中で倉井さんが「高田大岳は何年も目指していたが登れなかった。脚と天気がそろわないと難しい。今回は両方に恵まれ、無事登頂できて嬉しい」と挨拶された。

来年は五月十一日から十三日、新緑の中のスキーと決まった。来年の再会を約して青森空港より最終便で帰京した。

（小田 薫）

三月現地集会

早春の房州「高宕山」

三水会

きらきら輝く春の光を浴びての山行だった。

平成七年三月四日午後三時三十分、JR内房線君津駅集合。早春とはいえ、寒い。ときおり、雪混じりの雨が横なぐりに吹きつける。気象予報は関東南部を大雪の恐れあり、と注意を呼びかけていた。「いやだな」と思う反面「あるいは雪山を体験できる」という期待を持つ。

マイクロバスで国民宿舎「清和」に向かう。夜の懇親会では、カラオケを交え英気を養う。

翌日は、からりと晴れわたった絶好の山行日和。前日の雪が朝日に映えてまぶしい。八時三十分出発。林道高宕線第一トンネル入り口まではマイクロバス。九時きっかり、勝田リーダーの指導・案内で、準備体操ののち登り始めた。登山口に並ぶ六地蔵に見送られ、杉林のなかを石射太郎山（イシイタロウ、二五八メートル）へ一気に登る。

付近に石を切り出した跡がある。関東大震災で石場が崩れるまで大量の石を切り出していたのだという。ピークに展望地があり、ベンチがある。また小さな建物がある。建物は猿の餌づけ場所という。高宕山から石射太郎山一帯は野生日本猿生息地として国の天然記念物に指定されている。

この辺りは、昭和四十八年の国民体育大会「なのはな国体」が開催されたときの登山コースになった。首都圏自然道「関東ふれあいの道」にもなっており、コースはよく整備され、随所に案内板が立っている。

自然道を点検している人が通りかかった。「猿に出会いませんか」と聞くと「いまは、山に餌がなく里に降りている」と教えてくれた。

石射太郎から高宕山までは二・六キロメートル。時間は十分にあり、ゆっくりと歩く。平坦な道が続く。南房総とあって、椿が多い。花はすでに盛りをすぎている。木々は芽吹きの季節を迎え大きく膨らんだ芽が印象的である。アオキも多い。赤い実をつけている。風が吹く。前日、木々に積もった雪が舞う。ダイヤモンドダストというのか、きらきら光る。

「これはシュンランだ」と片岡さんがめざとくみつけた。ひだまりには、スミレの花もみつかった。雪割草があったはずだが、残念ながらみつからない。盗掘されたのだろうか。

十時三十分、高宕観音に着く。垂直の岸壁に寄り添うようにお堂が建てられている。少し早いがここで昼食。幹事・酒匂さんのオデン、菊地さんのアサリの酒蒸しという豪華な食事に堪能。例の案内板によると、観音さまは奈良時代に僧・行基が彫刻したものだという。源頼朝が源氏再興を祈願したとも伝えられる。

観音堂からは、岩をくりぬいたトンネルを抜け、さらにロープと梯子の助けを借り、三十分足らずで高宕山の頂上に着く。

頂上（三一五メートル）は狭い。七、八人も立てばいっぱいになる。三六〇度のパノラマが広がった。東京湾が展望できる。真向かいに見えるのは横須賀の火力発電所。その向こうに丹沢の山々。富士山は雲に隠れている。空は青く、海も青い。方向を変えると、千葉のコンビナート、羽田への大型ジェット機が次々に頭上をよぎる。

下りは一時間ほど。急な下りのあと、尾根を巻いての下りが続いた。途中の八良塚（三四二メートル）は、このあたりの最高峰。重なりあって広がる房州の山々を望み、低い山とは感じさせない。予定より早く一時五十分、奥畑に下山。参加十五名。

（高橋重之）

味の技、心でつくる

創作料理 むさし坊

むさし坊 日比谷店
（東宝ツインタワービル9F）
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905

むさし坊 麹町店
（有楽町線麹町駅際）
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313

むさし坊 神田西口店
（神田西口通り商店街）
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015

友膳ゆうぜん
（半蔵門線半蔵門駅3分）
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店（日本TV通り五番町交差点角）
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五～七枚以内でお願いします）。

エベレストが二メートル低くなった話

木崎甲子郎

隔月刊の「ヒマール」という雑誌がカトマンズで売られている。日本でもとっている方がいるかもしれないが、最近号に〝岩の頂、雪の頂〟という話が出ていた。昨年八月、中国国家測量局が最近のエベレストの新しい測量結果を発表した。それによると、新しい結果は、八八四八・八二メートルで頂上の積雪が二・五五メートルなので、雪層の厚さを引いた正確なエベレストの標高は八八四六・二七メートル、というのである。

この評者は「この話は一見正確そうだが、頂上のドリフトは始終動いているはずだし、またスチールの棒で雪の深さを測ったという場所が真の頂になるかどうか、分からない。また、ヒマラヤのピークはすべて万年雪をかぶっていて、それが頂になっている。雪の下の岩の高さに何の意味があるか。こんなに始終、エベレストの高さが変わっては、われわれ庶民は迷惑千万」という論調だった。

僕はこれを読んで、論評は別にして中国さんやったな、と思ったのである。これには次のような経過がある。

一九五四年、インド測量局が中心になって、ネパール側から精密な水準測量と三角測量を行い、八八四八・七八メートルという結果を出した。これは雪面の高さであった。

一九七五年、中国も非常な努力の結果、これも水準測量、三角測量で、八八四八・一三メートルを発表したのだった。この値は雪面の高さ八八四九・〇六メートルで、雪層の厚さを〇・九三メートルとして、それを引いた高さが発表した標高なのであった。これこそ本当の標高ですぞ、というわけである。（僕はこの事実を知らずに、インド測量局の高さと比べたりしたことがあるのは、お恥ずかしい限りだ。小著『ヒマラヤはどこからきたか』中公新書）

ところが、一九九二年五月、かのブラッドフォード・ウォッシュバーン博士（ボストン科学博物館名誉館長）の率いる登山調査隊の隊長トッド・バールソンは、頂上に基点を作るため、九〇インチ（二・二メートル）のアルミパイプを押し込んだ。一・二メートルばかり下に硬い氷板があって、先につけておいた螺旋ネジでねじ込まなければならなかった。つまり、中国隊はこれが岩盤だと考えたわけだ。これを聞いて、しまった、と思ったに違いない。

さらに掘り進んだが、アルミパイプの長さが足りなくて、岩盤まで届かなかった。

アメリカ隊の目的は、単に高さを測るだけでなく長期計画で、エベレストを含むガンジス平原からチベット高原までの南北の地域に、最新の精度の高いGPS（人工衛星をつかった位置測定器）の測点を作り、長期にわたって再測し、プレート運動による水平垂直変位や重力測定をやろうという面白い計画の始まりであった。

一方、一九九二年秋には、これまた九十五歳の老大家アルディト・デシオ先生の号令のもと、イタリア隊（隊長ジルジオ・ポレッティ教授）がチベット側とネパール側からGPSを担ぎあげて、エベレストの高さを測ろうとしていた。チベット側はもちろん中国と共同である。昨年夏に中国が発表し、ネパールの雑誌で批判されたのはこの時の測量結果なのであろう。

イタリア隊からの発表はまだないようだ。彼らが使っていたGPSは少し旧い型で精度が悪いからだ、という話を聞いた。それが本当だとすると中国の発表もあやしくなる。イタリア隊はさらに精密水準測量をロプチェからルクラ、さらにジリまで続けるという。ジリはカトマンズからの自動車道路の終点であり、ネパールの水準点がある。それにつなげようという計画だ。そのあとにはまた新しいエベレストの高さが発表されるに違いない。

そこで、ウォッシュバーンじいさんは、これは国際共同計画にしたほうがよいと考えたのだろう。イタリア、中国、ネパール、日本に呼びかけて、国際「サガルマータ地球物理研究プログラム」を作り上げた。昨年二月から五月頃のことである。

ネパールにはトリブバン大学の学長を通して、地質学教室に協力依頼があった。当時の学長も教室主任も乗り気で張り切っていたが、秋に、主任が任期も終わらない前に交代させられて話がおかしくなった。その後、総選挙で共産党政府に代わると、学長も主任もまた代わり、この話はどこかにかすんでしまった。ウォツシュバーンじいさんはやきもきしているだろう。

一方、中国は例によって、費用さえ出してくれれば喜んで参加する、といった様子だったが、この計画が始まるその前に、初めに述べたエベレストの新標高を発表した、というのが経過である。なかなかやるものである。学術の国際共同計画といえども、丁丁発止というところがある。

この「サガルマータ地球物理研究プログラム」は、去年のポストが今年から始まることになっているようだが、なかなかの見ものである。

（カトマンズ在住）

カット　中村あや

海外の山

トムとケイトの母親がやったこと

江本嘉伸

昨年秋、対ヤクルト戦で満塁で二塁打を打ち、勝利をもたらしたジャイアンツの遊撃手、川相が〝ヒーロー・インタビュー〟で、観客席にいた三人の子どもの名を呼んで「パパは頑張ったよ！」と絶叫した場面がちょっと話題になった。人間らしくて良い、と共感も呼んだが、おいおい、プロ選手がそんなことでいいのかよ、という辛口評も少なくなかった、と記憶する。

この五月十二日昼過ぎ、二人の児の母親であるイギリス女性、アリソン・ハーグリーブス(三十三)がチョモランマの頂上で叫んだ言葉は、川相選手のせりふと似ていたが、いま少し歴史に残るものだった。

「トム、ケイト、私の二人の子どもたち、お母さんは今、世界のてっぺんにいるのよ。そしてお前たちをとっても愛しているの！」

父親とともにベースキャンプにいたトムとケイトは、自分たちの母親が目的を達したことはわかったろうが、世界最高峰への三十二人目の女性登頂者であるハーグリーブズが無酸素、単独という困難な方法で頂上に立ったことの意味は理解できなかっただろう。二人はまだ五歳と三歳なのだから。

「無酸素、ソロ」を自らに課したハーグリーブスは、前日の五月十一日午後、八二九一メートルの第三キャンプ地点に到達、十二日午前四時四十分にキャンプを出発、午前九時には第二ステップ直下に達した。昼過ぎに山頂に立って、無線で子どもたちに話しかけた後、記念に絹製の花を雪上にさして下山したという。

ハーグリーブスは、昨年秋ネパール側からエベレストに挑戦し、サウスコルまで達したあと、悪天で退却しているが、この時もトムとケイトはベースキャンプで遊びながら母親の帰りを待っていた。

彼女はその前年の九三年夏、三か月かけてヨーロッパ・アルプスの六大クラシック・ルート、つまりアイガー、マッターホルン、グランド・ジョラス、ドリュ、ピッツ・パディレ、チマ・グランデの各北壁の連続単独登攀をやってのけた。無論、この時も幼い子どもたちを連れての〝転戦〟だった。しかもそれだけでは物足りず、十一月にはもう一度グランド・ジョラスをめざし、難ルートの北壁クロ側稜をやはりソロで完登、頂上からヘリで吊り上げられて帰還している。すごい女性クライマーが現れたものだ。

先述の通り、エベレストの頂きへ登った女性は一九七五年五月の田部井淳子以来、世界で三十二人を数える。うちインドのサントシュ・ヤダブは二度登頂しているので延べでは三十三人目だ。残念ながら二人は登頂を果たしたあと、下山中にスリップ事故などで亡くなり、他の二人は別の山で遭難死している。

女性初登頂二十年と、国連主催の第四回世界女性会議が九月北京で開かれるのを期に、この六月二十四日、「エベレスト・ウィメンズ・サミット」が東京で開かれる。アリソン・ハーグリーブスの快挙は、まさにクライミング最前線の女性の力を象徴するものだが、本人は、K2をめざすために「サミット」には来られないらしい。

ハーグリーブスと同じ日、二十四歳の台湾女性、江秀真も頂上に立った。彼女は新しい体験をひっさげて来日する予定だ。

図書紹介

カット　中村あや

共同通信社・編
『山を歩けば』

山を歩けば、丘陵地帯も村落近くの里も、森林も渓谷も奥山も、今荒れている。山を縦に歩くのでなく、横に歩いて見聞し、それぞれの地に息づくもの、生活を営む人たちの眸を通して、それを七章に分けて語っている。

棚田を守ろうと奮闘している人たち、わずかに残る木地屋、山小屋の経営者。今は山小屋で風呂に入れる。これはお客さんのためだけにあらず、従業員が幾日も風呂に入れないと居着かないそうな。山も変わったが、そこへ行く人も変わってきた。そのことを四十九の事例をあげ、それぞれにメモを付し、資料を提供しながら語っている。この広大無限の宇宙に人が住めるのは、この地球だけ、もっと大切にしようではないか、本書はそう語りかけている。

一九九四年十一月　㈳共同通信社発行　A5判　二七四ページ　千六百円（図書室未蔵品）　（飯田　進）

奥日光写真クラブ・編
『山からのたより』

地元日光に在住する十名のメンバーにより、春夏秋冬、時々刻々変化を見せる奥日光の自然美を粘り強く克明に追求し、六十点にまとめた小写真集である。

一葉一葉の作品の背後には、決定的な瞬間をとらえるために、何日も何日も夜明けから日没までシャッター・チャンスを追い求めた情熱が生み出したものであり、奥日光の自然に対する深い愛情がうかがえる。

この写真集は小品ながら、光と影と色彩により奥日光の自然美を再認識させてくれるものがある。

一九九〇年十月　奥日光写真クラブ
発行　非売品　問い合わせ先／日光市中宮祠丸山　代表・原田正明

（大橋　晋）

戸田博子・編
生誕百三十年記念誌
『志賀重昂―回想と資料―』

祖父の生誕百三十年を記念して孫の戸田博子氏が呼びかけ、遺族が文を寄せ、写真・資料を寄せて作ったアルバムのような私家版・志賀重昂の世界。

私家版とはいえ、大変立派で豪華な造本である。かつて子息の志賀富士男氏が編まれた『志賀重昂全集』全八巻に収録されなかった著作なども掲載され、遺族ならではの珍しい写真もたくさんある。重昂と「アラモの砦」の話も興味深い。ただし山については明治十七年の地理学的報告書「長野戸隠山紀行」の草稿が抄録されているだけで、寄稿文にも登山に関する記述は皆無といってよい。重昂の事績に対する遺族（あるいは世間）の観念と、JAC名誉会員に寄せる我々の思い入れとの乖離が如実に現れているのが面白い。

一九九四年七月刊　B5判　二八七ページ　（平井吉夫）

㈶日本自然保護協会・編
『秋田県田沢湖町駒ヶ岳山麓イヌワシ調査報告』

リゾート開発予定地内の繁殖地での三年間にわたる観察レポートである。この種の報告書は、開発反対を最前面に出しがちであるが、本書はイヌワシ研究の専門家集団による追跡調査であり、写真は美しく、図版は分かりやすくイラストが効果的に使われ、興味深く読み進める。残念なことに調査期間

書籍受入報告（1995年4月）

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
慶応大山岳部登高会（編）	トランゴ登攀チーム1994　報告書	12pp／27cm	慶応大山岳部登高会	1995	発行者寄贈
平塚山岳協会（編）	剣沢　'93：平塚山岳協会創立40周年記念誌	120pp／26cm	平塚山岳協会	1994	発行者寄贈
奥山茂彦	大興安嶺をゆく：郷愁の満州	275pp／22cm	人文書院	1994	著者寄贈
林野庁森歩き研究会（編）	林野庁フォレスターが選んだ森と樹木のフィールドガイド：関東エリア編	141pp／22cm	山と渓谷社	1995	出版社寄贈
東勝公	軌跡	247pp／19cm	山路書房	1995	著者寄贈
吉村迪	信仰の山	238pp／19cm	東京新聞出版局	1995	出版社寄贈
法政大タクラマカン委員会（編）	沙漠・水・人間：日中合同法政大タクラマカン沙漠調査報告書　'95	238pp／26cm	法政大学	1995	発行者寄贈
鳥居亮	山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化研究（論文集:1993.4，報文集:1993.7，追加訂正集:1994.10）	／27cm	神奈川工科大学	1994	著者寄贈
山村調査グループ(編)	村の記憶	311pp／21cm	桂書房	1995	出版社寄贈
浅野孝一	のんびり山歩きハンドブック：楽しく安全に歩くために	174pp／18cm	自由国民社	1995	出版社寄贈
高澤光雄（編）	北海道　登山記録と研究	191pp／21cm	札幌山の会	1995	編者寄贈

中に巣立ちしたいく羽かのヒナは成鳥として確認されていない。大好物である野ウサギの生息を保証する自然環境を保全しないと、イヌワシは絶滅するということになる。

本会の自然保護委員会でも、山形支部の人たちを中心に、鳥海山麓のリゾート開発地でイヌワシの営巣地探しを続けていることを併せてお伝えしておきたい。

一九九四年発行　A5判　一一三ページ　七千円

（松沢節夫）

『覆刻日本の山岳名著』・『新選・覆刻日本の山岳名著』
―会員特別頒布に寄せて―

図書委員会

登山と他のスポーツとの最大の相違点は多様性・歴史性にある。山容の相違が多様な登山を生み、技術の進展が歴史性をもたらした。嬉しいことに登山者はそのいずれをも追体験することができる。さらに登山が他のスポーツと異なる点は、この多様な歴史の各時点において、それぞれの山の世界を記録する優れた書物を遺したことである。私たちはそれら先人が創造した世界にいながらにして遊ぶことができる。登山は身体運動と読書とが分かちがたく結びついた実践文化なのである。

一九七五年、日本山岳会は創立七十周年を記念して、これら山の古典を厳選した『覆刻日本の山岳名著』（全十八点二十二冊）を企画・編集し、大修館書店から刊行、その三年後に全二十点二十九冊を収める『新選覆刻日本の山岳名著』を上梓した。おかげで、入手困難な山岳書の宝庫を身近に持てるのもありがたかったが、何よりも本好きを喜ばせたのは印刷・造本・資材などが可能な限り原本に忠実に復元されていたことである。登山文化史の後発世代の悲哀はこれによって随分と慰められた。

このたび日本山岳会創立九十周年を記念して、再び同叢書が特別頒布される。詳細は下段の広告や版元からのDMにゆだねるが、定価は二十年前と同じ、会員には十パーセントの割引価格で提供し、収益の一部は版元から日本山岳会に還元されるという。かつて入手しそこなった会員諸氏にはまたとない好機であろう。

（平井吉夫）

日本山岳会創立90周年記念キャンペーン

《日本山岳会企画編集商品特別頒布》

日本山岳会企画・編集　大修館書店発行

①覆刻日本の山岳名著
18点22冊＋解題書＋特別資料セット
定価 1,95,700円
会員特別割引価格 176,130円

日本山岳会企画・編集　大修館書店発行

②新選覆刻日本の山岳名著
20点29冊＋解題書＋特別資料セット
定価 1,80,250円
会員特別割引価格 162,225円

日本山岳会企画・編集　大修館書店発行

③日本山岳会「会報」第一集
覆刻合本1号～100号（昭和5年～15年）
頒価 12,360円
会員特別割引価格 11,124円

日本山岳会企画・編集　大修館書店発行

④日本山岳会「会報」第二集
覆刻合本101号～200号（昭和16年～昭和33年）
頒価 14,420円
会員特別割引価格 12,978円

N・ディーレンファース 他著　西堀栄三郎・宮下啓三 監訳　大修館書店発行

⑤図説百科山岳の世界
定価 18,540円
会員特別割引価格 16,686円

＊①の山岳名著セットには③が、②の山岳名著セットには④が含まれています。

【会員特別割引価格実施期間】 1995年5月～12月
【申込・問合せ先】 日本山岳会事務局（電話03-3261-4433）
【申込方法】 振替用紙に商品名・部数・金額・住所・氏名・会員番号を明記の上、直接事務局へお申込み下さい。
＊それぞれ部数僅少につき申込順に送付致しますが、品切れの場合はご容赦下さい。

大修館書店
〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 電話03-3294-2221

この機会に、「山の文化的遺産」をぜひお揃え下さい！

創立90周年記念事業募金応募状況

（1995年5月8日現在）

累計／872名／2693.2口／13,455,000円

●**40口**（200,000円）
藤平正夫

●**20口**（100,000円）
梅木秀徳　山田二郎

●**10口**（50,000円）
大倉昌身　西村政晃

●**6口**（30,000　円）
故河野幾雄未亡人

●**4口**（20,000円）
池田知幸（計6口）　高良博人　大屋悌二（計6口）　東浜義男（計8口）　田邉史　羽田英彦

●**3口**（15,000円）
河合文恒

●**2口**（10,000円）
安藤桂三　桜井良夫　岡野谷誠　伊藤茂　杉野目浩　梅本知栄子　中世古隆司　堀秀臣　佐藤衛士　岡本康夫　鈴木淳平　嶋崎兵市　伊藤敞　坂神昌志　樹下基倫　小田島政行　中西豊和　石田稔郎　青木巌　久保三朗　矢羽々文一郎　重村清　河西彌一　沢井貞夫　野村芳雄　渡辺和雄　飯島正敏　村川八重子　浅利欣吉　関崎健弘　重村伝平　吉武正子（計4口）　丸茂キクヱ（計4口）　金田貞男　竹内堯　本城淳子（計4口）　金森繁三郎（計4口）　福島幸太郎　井上晃　徳仁親王（計4口）　平野武利　筒井稔　新村貞男（計4口）　和仁古昇　高橋俊彦　小田稔

●**1口**（5,000円）
加藤榮　阿部和代　染谷美佐子　三枝礼子（計3口）　北川豊培　布目治二　奥谷潤之輔(計3口)　廣瀬正　太田繁　高柳生雄（計3口）　小池潜　酒井定勝　橋本祥案　野々口文子　上野和之　渡辺正弘　渡辺恭三　鈴木正規　今村和子　山田和雄（計3口）　戸谷翠　赤嶺辰男　小田知枝

●**0．2口**（1,000円）
高田知典　清水巌

訂正　4月号の沢田勉は池田勉の誤りでした。お詫びして訂正します。

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

北海道支部

冬の十勝連峰
上ホロカメトック山・三段山

平成六年度の最終行事十勝連峰は二月十八～十九日の一泊で行われた。当初は二十名参加の予定だったが、前日三名が流感でダウンし、十七名が参加した。

札幌の合同庁舎北側に集合、マイカーを連ねて出発、上富良野町営の国民宿舎カミホロ荘に宿をとる。冬山の厳しさを考え、夜の会食も程々に止める。

翌十九日は上ホロカメトック山（一九二〇メートル）、三段山（一七四八メートル）と二班に分かれる。三段山は白銀荘ヒュッテのほうへ車を回し、ヒュッテ前から頂上までスキーで登る。粉雪の山スキーで有名なコースであるが、今回は重い新雪が腰近くまであり、トレースの消えた中段からは猛烈なラッセルを強いられ、頂上まで二時間四十五分かかった。

三段山は晴れていたが、上ホロカメトックをはじめ十勝岳など二〇〇〇メートル前後の頂上はガスの中であった。一方上ホロカメトック班もトレースのないところはラッセルで苦労したが、化け物岩よりアイゼン、ピッケルの領域となり、頂上まで三時間半かかったという。支部長は病後久しぶりのアイゼンで感激一入であった。

これで六年度の支部山行は事故もなくすべて終了した。

■七年度の山行予定

五月　自然観察ハイキング
　　芦別岳登山
七月　大千軒岳と砂原岳
十月　武華山観月山行
二月　無意根山イグルー泊まり

（大久保五郎）

山形支部

蔵王・樹氷林を滑る会

まだ冬の帳の濃い三月四、五日に、蔵王で支部山行「樹氷林を滑る」会を開催した。例年とくらべて雪が多く、スキーは楽しめそうだが、天気がいまひとつだ。

今回は山の原点に浸ろうと、標高一二〇〇メートル付近の山小屋を使った。利用させてもらった山形山岳会の小屋は、故後藤幹次翁以下会員の協力で建設されたもので、電気、ガス、水道、電話、寝具と完備した快適なもの。三十八年間も立派に維持している山岳会会員の努力に敬服するものである。

四日はそれぞれ、三々五々に集合。「せっかく蔵王にきたのだから、リフトが止まるまで」と、急いでスキーに出かけるグループもある日没前のひとときだった。

夕食兼懇親会は、地酒あり、山海の珍味ありで、山、スキー、動植物の生態、保護など談論は尽きない。折原会員の奏でる免許皆伝の尺八の見事な音色が、静かな雪山に響き渡った。

翌五日、地蔵岳へと向かう。天候は昨日と同様はっきりせず、深いガスが立ちこめている。三郎岳からパラダイスへ、そして涸沢の頭へとリフトを乗り継ぎ、トドマツヒュッテからケーブルで地蔵へと向かい、山頂駅下車。地蔵尊に全員で安全祈願し、ザンゲ坂を一気に滑り始める。樹氷はまだ健在で、われわれに幻想のひとときを与えてくれる。視界はよくないが皆スキーは達者。中には思い余って深雪に潜ってもがく者もいるが、自然と接するにはこれが一番だ。

各自思い思いのシュプールを描きパラダイスへ。ここで正午までフリータイム。各々それぞれのゲレンデ、コースへと散ってゆく。蔵王は雪質、雪量、樹氷群に恵まれ、ゲレンデも豊富なことで、この山小屋を利用しての企画も恒例になりそうだ。

（長岡伸恭）

■会員異動

▼物故

猿山和彦（一〇六三二）6・9・23
増本茂（一四〇五）7・1・16
宮城恭一（八八六三）7・4・6

▼退会

岩佐敏彦（一〇一〇八）7・3・31
田原正子（九四八〇）7・4・1
塚本福治郎（四六四七）7・4・24
山田光興（六四七九）7・4・30
織田澤孝全（一〇六三〇）7・4・30
松田幸一（一一五三六）7・4・30
上村猛（一一三六五）7・4・30
冠木伊右衛門（六一三九）7・4・30

▼終身会員

木村俊博（三五二八）
久保三朗（四〇七九）
佐久間高男（四三〇一）
進藤昭（四七六〇）
北林嘉鶴子（七五八四）

会務報告

■四月定例理事会

日時　四月十三日十八時四十分～二十時十分

場所　日本山岳会会議室

【出席者】中村副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、南川、伊藤、南井、堀井、溝口、中川、大谷各理事、中島、川崎各監事、斎藤、西村各常任評議員

【委任】藤平会長、松浦、水野各理事、湯浅、宮下、神崎各常任評議員（渡邊、山本各理事、重廣常任評議員はマカルー登山隊参加中）

議事に先立ち、入院中の藤平会長が四月十五日に退院し、五月理事会には出席する予定と、小倉常務理事から報告された。

【審議事項】

㈠　山岳名著覆刻版・会報合本の販売促進協力の件　南井、小倉

マカルー登山資金集めの一環として、㈱大修館書店から申し出があり、本会への還元金も期待される。

「覆刻日本の山岳名著」一九七五年発行・十九万円

「新選覆刻日本の山岳名著」一九七八年発行・十七万五千円

「会報一～一〇〇号覆刻合本」一万二千円

「会報一〇一号～二〇〇号覆刻合本」一万四千円

期間＝五月～十二月

会長の推薦文を出し「山」に広告を掲載する。

「日本山岳会七十周年記念版として発売・好評を博したが、改めて会員にPRすれば、多くの購読者を得ることが可能と考える」＝南井　承認

㈡　展示資料の借用申し込み　小倉

植村記念財団から、植村直巳のエベレスト登山二十五周年として四月二十九日～十一月二十三日まで記念展を開くが、本会が所有する資料借用の申し入れがあった。

資料委員会で大町・松本各山岳博物館に照介した上で対応に当たる＝山口　承認

㈢　春山と雪崩シンポジウムについて名義後援要請の件　片岡

日程　四月二十二日㈯十三時～十七時

場所　国立オリンピック記念青少年総合センター

主催者（山岳レスキュー協議会・㈳日本山岳協会）から後援の要請があった。　承認

㈣　マカルー登山隊の件　村井

①マカルー登山の状況について説明があった。

②登山隊の費用　大倉

・文部省スポーツ基金から七百万円の認可・給付が内定した。

・四月の支払金として六百六十万円を本会より立替払いする。これはカルカッタ～コダリの運送費、インマルサットの使用料などである。　承認

㈤　九十周年合同募金の現状（四月八日現在）　小倉

会員募金　七百八十九名

二四四八・八口

一千二百二十四万四千円

企業募金　六十四社

一千六百九十五万円

なお、総会通知書に振替用紙を同封し、会員には再度の要請を行う。承認

㈥　通常総会提出議案の件

山と医療

登山における呼吸法

浜口欣一
（国立佐倉病院臨床検査科病理）

生体が生命を維持するために必要な酸素を取り入れ、物質代謝の結果生じた炭酸ガスを排出する働きを呼吸という。肺胞内の空気と血液との間のガス交換を肺呼吸、血液と組織細胞との間のガス交換を細胞呼吸という。

つまり血液を介して空気中の酸素は組織に運ばれ、組織の炭酸ガスは空気中に排出される。肺では炭酸ガスの多い呼気と外界の空気とを交換する。これを換気という。換気は呼吸運動によって行われ、脳の呼吸中枢によって自動的に調節されている。登山をするにあたって換気は、心・循環系とともに重要である。

では効率のよい換気はどうすればよいか。呼吸運動には、胸郭挙上、横隔膜沈下によって胸腔容積が拡大し空気が受動的に流入する吸息運動と、胸郭の沈下、横隔膜の挙上によって空気が排出される呼息運動からなる。胸郭の運動による呼吸を胸式呼吸、横隔膜の運動による呼吸を腹式呼吸という。通常は両者が合併した胸腹式呼吸である。

登山では意識的に横隔膜を動かす深い呼吸によって、肺の隅々まで空気を入れて、炭酸ガス交換をする腹式呼吸のほうが効率がよい。登山中に息苦しくなってハアーハアーする浅い呼吸は、血中の炭酸ガスの濃度を高めて換気亢進（hyperventilation）を起こし、呼吸困難をきたすことがある（過換気症候群）。逆に、深い呼吸を続けると血中の炭酸ガスの呼出によって低炭酸症となり、中枢神経系の興奮性が亢進して痙攣を起こすことがある。

行動中呼吸を整えるときには、呼吸運動の化学的調節としての炭酸ガスが重要な働きをしていることを念頭に入れた呼吸法を行うことがよい。

①平成六年度収支決算について　大倉
四月十日、総務担当常務理事、財務担当常務理事立ち会いのもとに、中島、川崎両監事により監査の結果、記帳は正確であり、支出は妥当である旨の報告がなされた。　承認
②組織の見直しと、細則の一部改定について　中村副会長
一月二十日、二月二十三日と二回の臨時理事会、三月理事会を経てまとめた。これに伴う細則の第二条、第三条第四項、第四条、第十二条の一部改定と、今後二年間を試行期間として発足する旨を総会提案とする。　承認
③役員人事の件について　小倉
理事、評議員については、候補をあげて次回の理事会に承認を求めることとする。
(七)　マッキンリー気象観測登山隊の件
科学研究委・大蔵
第六次として現役学生五名を含むOB・高年者など十名で実施の予定である。登山に対する現地への本会代表者名の嘆願書を要請したい。　承認
(八)　議事録署名人の件　小倉
四月理事会議事録署名人に大森理事、南井理事、五月総会議事録署名人に南川理事、溝口理事に。　承認

【委員会報告】

●図書委員会　第二回「古道を尋ねて」を企画。五月二十七日(土)、笹子駅・十時集合、笹子峠を歩く。

●総務委員会　五月二十日(土)、支部長会議を水道橋グリーンホテルで行う。

●集会委員会　四月九日(日)弘法山でサクラハイク、鶴巻温泉で懇親会を実施、参加者三十数名。五月二十五日(木)片岡氏を講師にルームで山菜勉強会。六月十日～十一日、守門岳近辺で若葉会山行。

■評議員会

日時　四月十一日(火)　十八時～二十一時三十分
場所　日本山岳会会議室
【出席者】中村副会長、斎藤、西村、湯浅常任評議員、西丸、村木、國見、広江、山田、松田、田中、梅木、宮本、徳久、田部井各評議員
【委任】宮下、神崎常任評議員、小須田評議員
議事に先立ち常任評議員の互選により議長に西村常任評議員を選出した。

議事

(一)　平成七年度通常総会提出議案の件
定款三十二条にもとづき理事会が作成した原案を評議員会としても以下の四件を了承する。
①平成六年度収支決算について　②日本山岳会組織の見直しについて　③日本山岳会細則改定について　第二条、第三条、第四条、第十二条　④平成七年度除籍予定対象者について

報告事項

(1)　マカルー登山隊一九九五現況
(2)　マカルー九十周年合同募金（四月八日現在）企業六十三社　一千四百九十五万円（入金一千二百六十八万円）会員　七百八十九人　一千二百二十四万四千円
(3)　役員人事
会長より今回の評議員会で再度検討いただきたいとのことなので、再度お願いしたい旨提案があり討論に入った。
会長　村木潤次郎
副会長　宮下秀樹、斎藤惇生
以上の案に全会一致で推薦することを決める。なお他の役員候補については議事録発送までに絞り込み、同時に各評議員にお知らせし、追認していただくことで了承された。

ルーム日誌

4月

4日　九十周年記念事業委員会・募金委員会　アルパインスケッチクラブ
5日　青年部　山の自然学研究会
6日　九十周年記念事業委員会・実行委員会　学生部
7日　学生部　資料委員会
10日　会計監査　図書委員会　アルパインスキークラブ
11日　評議員会　二火会　アルパインスキークラブ
12日　百年史委員会　93同期会
13日　理事会　学生部　青年部
14日　フォトビデオクラブ　自然保護専門委員会
17日　フィルムビデオ委員会　総務委員会　常務理事会
18日　科学委員会　自然保護専門委員会
19日　三水会　山研委員会
20日　学生部
24日　九十周年記念事業委員会・財務委員会　青年部
25日　自然保護委員会　九十周年記念事業委員会・データバンク研究委員会
26日　資料委員会　山の自然学研究会
27日　九十周年記念事業委員会・記念フォーラム委員会
学生部　山の自然学研究会

4月来室者574名

今年もさんけんで会いましょう

INFORMATION

◆初夏の高尾山を写そう

フィルムビデオ委員会

第六回写真撮影教室・ハイキングを（五月号で予告）予定通り開催します。

集合　七月二日(日)　九時三十分　京王帝都電鉄高尾山口駅改札口前

持参　カメラ・ビデオなど（コンパクトカメラで十分可）、弁当。

＊九月末日、北アルプス立山周辺での撮影会を予定しています。

◆創立九十周年記念

岐阜・京都ブロック行事

岐阜・京都両支部では協議の結果左記のように記念行事を開催します。

○式典・記念講演

日時　七月八日(土)十六時～二十時

会場　ダイニック『アストロパーク天究館』滋賀県犬上郡多賀町

講師　伊谷純一郎氏（京都大学名誉教授・霊長類学専攻）

演題　今西錦司先生との山行・サル研究をめぐって

会費　八千円（懇親会費を含む）

○記念行事（イ、ロいずれかを選択）

日時　七月九日(日)

場所　イ、鈴鹿山脈　御池岳山行

ロ、探検の殿堂見学

参加申込　六月三十日までにハガキで。

＊岐阜支部員は

〒五〇〇岐阜市加納鉄砲町四－三七　岐阜支部事務局高木基揚宛

＊京都支部員は

〒六〇三京都市北区紫野上築山町四三－三京都支部事務局杉山イタル宛

＊両支部以外の方は京都支部へ

◆九十周年記念式典・中部ブロック

八月二十六～二十八日に山梨県下で開催されます。申し込みは六月二十～七月二十日、各支部担当者へ。詳細案内は七月号に掲載。幹事・山梨支部

◆上高地の自然をご案内します

山岳研究所運営委員会・自然保護委員会・山の自然学研究会

昨夏登場したインタプリターが、今年も八月一日から三十一日まで山研に常駐します。上高地の自然を観察しながら、自然学の感動をお伝えしたいという趣旨です。

梓川の渓谷、上高地に積み重ねられてきた深い自然史の意味をお楽しみください。

山研に事前に連絡されるか、当日常駐の本人に直接申し込まれても結構です。費用は無料です。

◆ジャック93会・第三回登山集会

昨年秋の第一回上高地は好評でした。今年も再度実施します。

日時　九月三十日(土)～十月一日(日)

場所　上高地山岳研究所

日程　九月三十日十六時　山研集合

オプションの霞沢岳へ行く人は二十九日夜、徳本小屋に宿泊のこと（予約は各自で）

会費　七千円（宿泊費、懇親会費など）

申込　封書で住所、氏名、会員番号、電話、生年月日を明記の上、七月二十一日までに日本山岳会ジャック93会宛。（住所、氏名記入の返信用封筒を同封のこと）

問合せ　森田英昭（〇三－三九九三－三五五一）十八時以降

代表幹事・星野幸太郎

◆今年の年次晩餐会のお知らせ

毎年十二月に行われている年次晩餐会は、十月十四日予定の九十周年記念晩餐会に変更となります。

◆藤江幾太郎・山の画展・第四十回

日時　七月一日～七日　十一時～十八時（日曜、最終日十七時）

場所　朝日アートギャラリー（ＪＲ有楽町、地下鉄丸の内線銀座Ｃ４朝日旅行センター隣　〇三－三五三五－七七四〇

◆写真展「岩橋崇至の世界－空の深淵」

白頭山、ロッキー、アルプス大縦走、黒部渓谷、北ぐにの山々の五十六点を展示します。入場無料

日時　七月十一日(火)～八月六日(日)

場所　代官山ヒルサイドテラスＦ棟

問合せ　㈲フォネラマ・佐藤美知子

Tel 〇三－三四一四－九九六三

Fax 〇三－三四一四－九九六四

❖編集後記❖

マカルー峰登頂の記事を本号のトップに掲げることができました。五月二十六日付け、ベースキャンプの重廣隊長の生々しい報告です。

本号の原稿締切りは五月十日。六月号にはぜひ載せたいと、トップのスペースをあけて、朗報を待ちました。そして、五月末の初稿にすべり込みで間に合ったというわけです。

くわしい登頂記は、いずれ掲載する予定です。

（伊藤　敞）

日本山岳会会報　山　601号

1995年（平成7年）6月20日発行

発行所　社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5－4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京（03）3261－4433

振替口座　東京3－4829

発行者　村木潤次郎

編集人　伊藤　敞

印　刷　株式会社　双陽社